キスリング展 –エコール・ド・パリの巨匠
KISLING Grande figure de l'École de Paris

7月17日(金)〜9月6日(日)　鹿児島市立美術館
9月12日（土）〜10月25日(日)　美術館「えき」KYOTO

100年前のパリで一世を風靡したエコール・ド・パリの巨匠キスリングの業績を回顧する特別展。キスリングのパリ・デビュー100周年を機に企画。パリ市立近代美術館やジュネーヴのプティ・パレ美術館、ポンピドゥー・センターをはじめフランス、スイス、日本の美術館の名品を中心に構成し、華麗で哀愁に満ちた世界を概観する。2019-2020年の2年間にわたって全国の7美術館を巡回。「エコール・ド・パリ 100年」を迎えた2020年代、20世紀の変革の時代を省察し、人間や民族といった芸術の今日的な課題を照らしながら、1世紀前のエコール・ド・パリの潮流を検証する新たな企画への序章として開催する。

キスリング―華麗なるメランコリー

村上　哲
アート・キュレーション代表

今から百年前のフランスで、時代の寵児として一世を風靡したキスリング。ポーランドに生まれ、パリに出てピカソやモディリアーニ、藤田嗣治らと交友しながら活躍し、エコール・ド・パリを代表する画家として名を馳せている。人情味に溢れた大らかな人柄だったキスリングは、“モンパルナスのプリンス”として仲間から愛された。

キスリングやモディリアーニらは、故郷をあとにしてパリにやってきた異邦人であり、その多くはユダヤ系であった。彼らは、この芸術の都にちなんで「エコール・ド・パリ（=パリ派）」と呼ばれるようになる。遠い昔に祖国を失ったユダヤ民族として生まれ、異国の空の下で生きる彼らの作品には、メランコリックな情趣が沁みわたる。

1918年、第一次世界大戦が終結し、パリには多彩な文化が咲き誇る「狂乱の時代」の幕が開いた。1919年の秋、キスリングはロワイヤル街のドゥリュエ画廊で初めての個展を開き、艶やかな色彩を駆使したスタイルが注目を浴びる。キュビスムやフォーヴィスムなど前衛の手法を古典的なレアリスムと融合させる画風は、フランス絵画の伝統に新たな息吹を与えた。

＊

キスリングは早い時期から、フランスに同化しようとした画家であった。第一次世界大戦時には外国人の部隊に志願し、その武勲によりフランス国籍を取得する。しかしパリで起きた異邦人への排斥や、ユダヤ民族を迫害したナチス・ドイツに対しては強く反発し、抗議活動をしている。そのためヒトラーから死刑宣告を受けて、アメリカへの亡命を余儀なくされた。

私生活でのキスリングは、最愛の妻ルネと生涯添い遂げて、2人の子宝にも恵まれるなど、家族愛に満ちた幸福な日々を送っている。その一方でユダヤ人として生まれながらも、フランス人として生きることを選んだ人生は、民族のはざまで揺れ動く葛藤に満ちたものでもあった。フランスの美の洗礼を受けてもなお、画面全体を覆い尽くすものはユダヤの血の匂いである。艶やかな色彩と陰鬱な影とがせめぎあい、存在と虚無とが背中合わせとなる。

多様な価値観が交錯するなかにあって、キスリングは、常に「自分とは、何者であるか」を追い求めた。その独自のスタイルには、他の誰のでもない比類なき個性が際立つ。自らの存在理由を模索した道行きは、人間としてのアイデンティティーを探す旅路でもあった。エコール・ド・パリの誕生から100年、激動する世界と向き合ったひとりの画家の軌跡を辿ることは、あの変革の時代へと思いを馳せる濃密な時間となる。

（むらかみさとし／比較芸術学、キュレーター、キスリング展 日本側統括・監修）

※本稿は、南日本新聞に掲載された『キスリング展』特集記事（2020年7月24日）に寄稿した内容をもとにしたものです。

村上　哲／むらかみさとし
1957年、熊本県出身。東京藝術大学卒業。熊本県立美術館学芸課長を経て2018年から現職。海外展の企画統括・監修に携わる。専門は比較芸術学、エコール・ド・パリ研究、ミュゼオロジー（美術館運営学）。
現在、熊本県美術家連盟理論部門委員。

MEMO
キスリング　KISLING　（1891-1953）
ポーランドの古都クラクフの裕福なユダヤ系の家に生まれる。1910年パリに出て、1912年からピカソらと交友、キュビスムに感化される。1913年以降はモンパルナスで、モディリアーニやパスキン、藤田嗣治らと親交を結んだ。1910年代の末、華麗な色彩と滑らかな画肌を駆使した独自の画風を確立、哀愁の漂う作品は人気を博した。第二次大戦時はナチス・ドイツの迫害から逃れて渡米。1946年フランスに帰国し、パリと南仏を行き来しながら活躍した。

キスリング
1925年
©KISLING ARCHIVES

《赤い長椅子の裸婦》
1937 年　油彩・カンヴァス　96×146cm
パリ市立近代美術館 Photographie
©Musée d'Art Moderne/Roger Viollet

透き通るような白い肌と不穏な影の対比が、ミステリアスな雰囲気を醸す。伝統を継承し妖艶に変容させたキスリングは、裸婦像に新たな歴史を拓いた。引き伸ばされた姿態には、新古典主義の画家アングルの影響も窺える。

《ベル＝ガズー（コレット・ド・ジュヴネル）》
1933 年　油彩・カンヴァス
160×110cm
カンティーニ美術館、マルセイユ
©Musée Cantini, Marseille

作家コレットの娘で、ベル＝ガズー（小鳥の美しい鳴き声）の愛称で呼ばれた女性。白百合と鮮やかなタータンチェックが、可憐さを際立たせる。鬱蒼と生い茂る植物は、素朴派のアンリ・ルソーが描いた密林に影響された表現。

《ミモザの花束》
1946 年　油彩・カンヴァス
73,5×60cm
パリ市立近代美術館 Photographie
©Musée d'Art Moderne/
Roger Viollet

鮮やかなミモザの花は、キスリングが繰り返し描いたお気に入りの画題。無数の黄色い斑点を散りばめて、背景は澄んだ空色で塗り込められる。青い空に映える太陽のような配色は、心躍る生命の輝きとなって冴えわたる。

《果物のある静物》
1914 年　油彩・カンヴァス　65×81cm
プティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
©Petit Palais/Art Modern Foundation,Genève

若い頃にキスリングが憧れた画家は、ポスト印象派のセザンヌであった。1910 年代の斬新な空間にはその影響が窺える。セザンヌ体験を通して、キスリングは伝統的な遠近法から解き放たれ、独自のスタイルを切り開いた。